

鮎川信夫の思想

板垣哲夫

(日本史学)

本論文は、日本思想史において重要な位置を占めると考えられる詩人鮎川信夫（一九二〇～一九八六）の思想を、内在と超越との連関、及び内在と超越との離反という用語を導入することによって明らかにしようとするものである。内在とは、自己が世界の内部にとどまっているという人間存在のありかたであり、超越とは、自己が世界から脱却し、別の世界に向っていくという人間存在のありかたである。内在においては、自己と対象との対立が成立してはず、超越においては、自己と対象との対立が成立しているのである。内在対超越の対に對し、実体對觀念、即自對脱自、同一對差異、自然對作為の對を照応させることができる。内在・実体・即自・同一・自然の系列に對し、超越・觀念・脱自・差異・作為の系列が對立しているのである。内在と超越との連関とは、内在と超越とが相互に依

拠しあっている関係にある場合であり、内在と超越との離反とは、内在と超越とが相互に離反している場合である。一九四五年度の敗戦までを戦前・戦中期、敗戦から一九六五年頃までを戦後第一期、一九六五年頃以降死までを戦後第二期とし、順次考察する。鮎川の詩、文章、談話のほとんどは『鮎川信夫全集1』8、拾遺』思潮社、一九八九～二〇〇一年に依拠し、「全1」、「全拾」等と略記する。

1 戦前・戦中期（一九四五年）

この期の鮎川の思想において、内在と超越との離反が先行し、内在と超越との離反から内在と超越との連関が導き出され、離反と連関とが併存していると考えられる。

（一）内在と超越との離反

戦前・戦中期の自分の世代について鮎川は次のように述べている。

結局のところ僕たちはかなりながい戦争の期間を通じて、何事もしなかつたという事実には変りがない。戦争が終つて、再び荒廃の街中に昔の友人が集まつてきた時、「よく皆んな生き残つたものだ」という気持が、最初の言葉になつただけであつた。戦争のあいだは皆んなただ生きていただけなのである。生きていたからには、何事もしなかつた筈はないと思うかも知れないが、善悪の判断からと外れていた戦争中のわれわれの生活の中では何事もなし得なかつたのである。

徴兵制度が当時学生であつたわれわれに、どれほどはげしい精神的影響を及ぼしたか、測り知れないものがある。あの頃の学生なら自由な学問によつて自己の精神を形成しつつかある途上に於てすら、いずれ徴兵検査によつて、自分達が単に数でしかない徒刑場へ送り込まれるのだ、という意識を常に持つていた筈である。だが当時にあつては、誰もそうした青年の意識を深く追求することとは出来なかつた。三、四十代の進歩的インテリゲンチヤの思想的転向非転向問題などというものは、いわば当時の社会の表面に浮びあがつてきた問題であつたが、これは故意に表面から隠され

てしまつていた問題であつた。そして今日では、すでに忘れ去られた問題になつてしまつた。しかし、それはわれわれの世代に深く傷痕を残している。あらゆる物事に対して懐疑的でありながら、外的な事象をいつも自分達に強制されたものとして受取り、常にその事件や与えられた課題に耐えようとする心的傾向から、内部と外部の矛盾を怪しまずに、思想と行為の乖離によつて生きようとする超近代的自我に至るまで、いずれも戦争の空氣のなかで育つた精神の特徴をあらわしている。

われわれの世代は、埋もれた思想、埋れた言葉によつて、自らの可能性を葬つてきた。

われわれがわれわれ自身の行為に立ち会つていなかったということは、如何にも奇怪な事実である。しかもその奇怪なことが、戦争中に於けるわれわれ自身の行為の全部なのである。（「現代詩とは何か」51年、全2）（鮎川の詩、文章、談話はこのように著者名を省略する。51年は一九五一年で発表年）

外界に対処する自分の行為から自己の内面は乖離し、さらに内面と状況を媒介すべき思想、言葉も、外界、行為からの離脱によつて、展開、深化を阻まれ、内面は内閉し、萎縮、硬直していったのである。「我々の間から戦争詩が現れなかつた理由は、それが我々の（性

質」に合わなかったからに過ぎない。一九四二——三年頃、我々はあらゆるものを理解することを拒否してしまった。言葉への不信の感情(から)、作品を書いて発表するという胡散臭い仕事に、全然とり合おうとしなくなってしまうて、我々の同類のうちから種属の意味が消滅してしまった」(「困繞地」47年、全拾)。戦争を遂行する外界に迎合する詩にせよ、隠された批判をもつ詩にせよ、戦争状況に立ち向かった戦争詩は鮎川及びその仲間によって書かれることはなかったし、詩を書かず、沈黙したまま、内面において戦争状況をとらえなおし、批判するということもなかったのである。状況から離脱し、外界に働きかけるべき思想、言葉を喪失しているありかたは、生活、経験から意識的に脱却しようとした早期のモダニズム詩から一九四〇年中頃までの詩に至るまで通底していると考えられる。以上、外界、状況、生活へ超越することなく、自己の内面に内在しているのとらえることができる(超越から離反している内在)。

超越から離反している内在のみのこの受動的、自己防衛的なありかたから、超越から離反している内在と、内在から離反している超越との相互に緊張した併存の志向への移行を鮎川のうちにとらえることができる。一九四〇年後半以降の詩においては、超越から離反している内在と、内在から離反している超越とが相互に緊張しつつ併存していると考えられる。「形相」(一九四〇年八月)、「形相」(同

九月)、「泉の変貌」(同十一月)、「困繞地」(一九四二年三月)、「神」(同二月)、「神」(同二月)、「神々」(一九四二年五月)、「雨に作られし家」(同九月)、「橋上の人(第一稿)」(一九四三年五月)のうちに、この両者の併存をみることができるといえる。吉本隆明は、「未来に對してひとつの方向性をもつこと」が「自分を楽にする」ならば、そのような方向性をもつことを「自分で拒否する」ありかた、及び、詩の読者が「どこに移ろうと、どういうふうにならなっていく」と、あるいは書く者の側に移行しようとして、書く者に接近した位置に自分を占めようと、そういうことについて自由度をたくさん設けている」ありかたを、「困繞地」前後の詩に見出しているが、このありかたはこの両者の緊張しあつた併存であると考えられる。「自分を楽にする」「方向性」に自分を固定し、安住させることは、超越から離反している内在、及び内在から離反している超越の一方または双方への緊張なき埋没であり、「自由度」を設けることは、両者の緊張しあつた併存のうちに自己及び読者をとりこむことなのである。牟礼慶子は「橋上の人(第一稿)」を解釈して次のように述べている。「むなししい詩のいとなみもつかのまの花火のように消え去る。親しい人々の顔のゆらめきを残して、水は海へ流れ去る。群衆の行き来する風景は忘れられ、時間には沈黙がつきまとい、何者でもない存在としての自分に到達してこの詩は終わっている。　　へ橋上の人

よ 美の終局には／方位はなかつた 花火も夢もなかつた／風は吹いてもこなかつた 何者であるのかと呼びかけ、何者でもない無の存在を答に得て、へ橋上の人へは立ち去ろうとしたのである^②。「無の存在」のうちにおいては、超越から離反している内在と内在から離反している超越とが緊張しつつ併存しているのである。

鮎川は一九四一年八月一九日の日記に次のように述べている。

精神と肉体といふ概念を人間といふ全体を考へる場合に切り離して考へることは出来ない、などといふのは近頃の愚か者の論理である。私はこんなことを言つてゐるのを聞く度に胸がむかむかしてくるのだ。「精神と肉体」は分離してゐないものだと一体誰が言ひ出したものか、同一の人間のうちに、一つの行為とか、或る思索の閃きの内部に、この人間の特性である二種の要素が同時に発見され、からみ合つてゐるといふ理由からそんなことを得意になつて言ふんだつたら馬鹿げてゐる。それが間違つてゐるからではない。さうした平俗な観念が少しもわれわれの生活を豊かにし深めては呉れないどころか、却つて俗臭紛々たる市井人にしてしまふからだ。……

精神と肉体は人間の性格の根本である。この二つはあまりにもかけ離れた実体である。……あらゆる罪惡の根源は、この二つの

眼をもつて照らし出され、罪惡によつて自己の姿を儼き、それらの醜さ、美しさ、尊さのすべてを曝け出す。道德の諸基準は、当然原罪への敬虔な内省によつて絶えず覚醒せられてゐない限り、単に本能と、自然の趨かうとする自由とを束縛する法則（何時でも破壊出来るところの）としてしか理解せられないであらう。謂はば統一への憧憬には、原罪の観念に通ずる何かしらが含まれてゐる。（「日記II」41年、全2）

「精神」とは、内在から離反している超越であり、「肉体」とは、超越から離反している内在であり、両者の分離、併存が志向されており、さらに「原罪」における両者の統合への憧憬、展望が示されている。

（2）内在と超越との連関

超越から離反している内在と、内在から離反している超越との相互に緊張した併存から、両者の統合としての、内在と超越との連関が構成されていく。一九四〇年中頃までの詩には内在と超越との連関は全くみられず、同年後半以降の詩においても、超越から離反している内在と、内在から離反している超越との相互に緊張した併存が優勢であり、この併存からさらに萌芽的に内在と超越との連関が予感されているにすぎない。「また明日 お会いしませう もしも明

日があるのなら／あなたは誰かに向ってさう言った／みんなは黙った 眼を閉じ眼を開き 膝をみつめて、「あなたを愛する者はない／あなたには人の背中しか見えぬ／知識があなたを言ひにした／街の雑音はあなたの耳を不注意にした／だがあなたは僅かに口を利くことが出来る筈だ／へまだ見ねばならぬ まだ聞かねばならぬ」(「囲繞地」41年、全1)。詩「囲繞地」の全体的な絶望のうちでこれらの詩句は絶望と希望への予感とを併せもつことにおいて両義的である(希望は、内在と超越との連関への志向の萌芽である)。

雨の顔が

さつと青い畳のうへに來た

部屋から廊下へ

にぶい気配が仄暗い光触にただよふ

^{あるじ}主は ふと雨の顔になり

音もなく空を走る稲妻を見あげてゐる

荒れた庭に 花樹はむなしく崩れかかり

眼のまぼろしに妖しく憑かれた

いつか一つの息ながく絶えぬといふ
畳の上に 水平に做つて横たはり

たしかな暮しを算へてみる

夜半のけむり無常の風に耐へてきた

燻んだ柱の垂直を叩いて

^{あまじ}主は ひそかに想ふ

たとへば自らも垂直なる真空の如くありたい

雨の日のたちるふるまい

思案につかれて

とおい稲妻の明りをたよりに髭をそつた

畳よりも青い顔^{あたま}の 若い主はしばし呆ける

古い鏡には

ふりそそぐ雨のみだれも手にとるやうだ

(「雨に作られし家」42年、全1)

「水平」である「たしかな暮し」(内在)と「垂直なる真空」(超越)との離反と連関とが、超現実的な幻想のうちにおいて両義的に存在している。

戦前・戦中期においては詩よりも、詩論を中心とする評論において内在と超越との連関が展開されている。評論においては、連関が散文の形態において抽象的、観念的に先取りされているのである。

出征先のスマトラ島から肺結核により内地送還され、一九四五年二月に福井県三方郡の傷痍軍人療養所において執筆された「戦中手記」において、文学同人集団の「荒地」が理念化されている。直接には一九三九年三月〜一九四〇年五月に鮎川等が刊行した同人詩雑誌『荒地』をさしており、この詩雑誌の背景であるT・S・エリオットの「荒地」の理念が強く意識されている（戦後鮎川を中心に「荒地」グループは再発足する）。

各世代は、如何に歴史の中から自己の模範とすべきもの、自己の支柱ともなるべきものを選び出し、又それを解釈してゆくかによつて特徴づけられるものであり、「歴史を解釈することによつて歴史を変更し、……（そのようにして各世代の歴史は―引用者）創られてゆくのである。歴史が生々としてゐることは、人間が生きてゐることを示し、歴史が頽廃した時は人間自身が頽廃した時である。

私は歴史をさうした意味で理解すると共に「荒地」の意義を解明し、「荒地」の意味するところのものを理解することによつて歴史は本来の意義をもつて私の前に顕現し得たのである。「荒地」は我々にとつて最もつきりした経験的事実の集まりとして確実に把握し、細部についてもその「事件」の核心について繊細に感じ

とることの出来る特殊な社会史であるとも云へよう。

……「荒地」は実に社会と個人との間にある例外的な段階を示すものである。個人のゐない社会があり得ないやうに、君や私のゐない「荒地」はあり得ないし、社会がまた多くの「荒地」的なものに支へられてゐることも疑ふべからざることである。

「荒地」が一九三〇年代末期の我々の青年時代の精神に与へたいちぢるしい特徴を広い歴史的観点から顧みるならば、それは社会に対する個人の盾ともなり、又個人を社会的なるものに結びつける役目ともなつたといふ二つの異なつた面から見られねばならないだらう。（「戦中手記」45年、全2）

「荒地」は個人（内在）と社会（超越）とを連関させるものとしてとらえられている。個人のうちに内在しつつ、他者とのつながり（社会）へ超越する人間のありかたが強力、明瞭に現われたものとして「荒地」をとらえている。このような「荒地」は理念化された共同体としてとらえることができる。「戦地から帰つた私にとつて、戦争というもののおびただしい理念化、實際化に抗して全人的な自己をとりもどすためには、ぜひとも『荒地』というものの理念化が必要であつたのである。外部の重圧に抵抗する内心の拠りどころを求めようとすれば、当時の私にはそれ以外に行きつくところはなか

ったのだと言えると思う」としている（『戦中手記』後記「65年、全2」。超越の目標である社会は、家、国家と峻別された「町」としてとらえられる。次のように回想している。「どうして家にじっとしていられたかったのだろうか。家の中の孤独が耐えがたかったからだ。親の圧迫がどうこうというのではなく、話の通じる者がいないことからくる焦燥もあった。町なかには友だちがいて、自由になんでも話し合えた。たとえ友だちがいなかったとしても、だれもが他人である町では、孤独はそれほど苦痛ではなく、ときには束縛されない解放感として、それを味わうこともできた。こうして徐々に私の内部には、町の人が、一つの性格として育っていったようである」（「一人のオフィス」66年、全5）。当時の日記において、この町Ⅱ社会を自分の世界としてとらえている。「僕はあらゆる所に在る。僕が見たり、聞いたりする世界は、すべて僕の内的世界と関聯し、さまざまな形で解答が出てくる。だから僕の世界は決して一人で出来てゐるやうな感じがしない。数多の心が互に反撥し合ひ、数多の口がたがひに罵り合ひながら、一つの社会を形成してゐるやうである」（「日記Ⅱ」41年、全2）。

歴史とは共同体の時間的展開であり、「荒地」は歴史としてとらえられる。「戦中手記」においてさらに次のように述べている。

内地へ帰ってから今日迄の私を最も強く捉へたのは「歴史」である。我々は何のやうに歴史へ帰ってゆかねばならないのだらうか。歴史へ帰るとは、何も過去への郷愁ではないし改悔的な如何なる意味をも含むものではない。私の言ふ「歴史へかへる」とは、よりよく自己へかへるといふことに外ならぬのである。……「荒地」はかつての我々の身辺に生じた歴史のごとき存在であった。……「荒地」が常に永久に「今日であるところのもの」に執着することによつて、却つて歴史は真にその意義と特徴を現すのである。……

……「永遠に今日のもの」とは常に歴史的なものであり、歴史をもたぬといふことは今日を豊饒に所有してゐないといふことであり、当然未来も持たないものであらう。単に現在のなもの、——といふやうなものは昨日のものでないばかりでなく、現在のものでもないのだ。（『戦中手記』45年、全2）

さらに鮎川が影響を受けたT・S・エリオットの歴史意識について、「真の歴史的意识とは、単に過去の過ぎ去ってしまったこと意識のみに止まらず、過去の現存することの意識を含んだものである。そしてかかる歴史的意识のみが未来を担う力を具現し得るのである。未来は過去を併合することによつてのみ過去を征服することが出来、

未来が過去を自らの外に置き忘れる時に、未来は直ちに未来ではなくなるのである」としている（批評家の態度に関するノオト」39年、全2）。以上、鮎川の歴史意識において、過去（内在）は現在において未来（超越）と連関づけられているのである。

内在と超越との連関は、超越に連関している内在と、内在に連関している超越から構成されている。前者についてみてみよう。鮎川における超越に連関している内在は、肉体（内在）―死（超越）としてとらえられると考えられる。死は「意志中心主義を摧毁、冷静な熱気と永遠に対する崇高な観念を喚起する哲学者」であるとし、「永遠に根拠を与へるものは『死』より他にはないし、本能を甘やかしてくれるものも『死』より他にはないであらう」としている（『戦中手記』45年、全2）。死は肉体の死滅であり、肉体、本能（内在）に依拠している。しかし同時に時間からの脱却であり、永遠への超越である。鮎川において自己の肉体に対するナルシズム的執着があり、さらに母を中心とする近親への強い結びつきがあり、さらに死への親近感があり、いずれも肉体への感受性によって浸透されている。³「政治的論理の侵入は絶対に排撃せねばならぬ。文学には文学の論理があり、それによって世界を捉へ得ぬ、といふやうなことはない。文学の精神の根底のうちには、その『存在の肯定の形式』があり、文学の撰理によって自然に外部から導き入れられたところの世

界を形造る内部の法則、秩序の必然が支配してゐるべきものだからである。『世にあるすべて、そのままにしてよし』といふ芸術家の態度の背後にはさまざまな思索にかたどられたイロニイ、感傷、懷疑、抑圧、あきらめ、希望の感情的階梯がみられ、終局は芸術的目的である自然の高次肯定にたどりつくのである」（『日記II』41年、全2）。文学における「内部の法則、秩序の必然」は内在であり、「自然の高次肯定」は超越であり、肉体―死を内蔵しているとみることができる。

次に後者についてみてみよう。内在に連関している超越における超越とは、あるがままの事実、矛盾、分離、苦痛等に満ちた個別的事実の把握、受容である。この個別的な事実は普遍的、抽象的ではなく、一般化されてはならない。

この自然とか自由とかいふものは決して一般的考察によって、その真理に到達しうるものではなく、常に特殊化された人間の小さな些末事のうちに、或ひは個人の経験のうちに捉へてこそ価値あるものである。この神聖な観念（自然、自由―引用者）の一般化は、すでに人間の墮落の始まりと見做されなければならない。

何故ならば、文化といふものは、広く社会の性質から推察してみると決してそれ自体に於て価値あるものではなく、むしろ価値

を与へねばならぬものであり、又それは個人を一層孤独にするために存在してゐる精神的な取引の世界である。

価値の基準といふものを、個人を没却した一般文化史とか、徒らな又大真面目で演ぜられた人間の血腥ぐさい闘争とか、すべて虚ろな膨大さを誇る歴史書の一頁によつてその重みを計るべきではない。私に言はしむれば歴史とは悪い記憶である。現代の人の悲劇は、歴史のたつた二、三行のことに夢中になつて、生活の良心を見失つてゐることだ。神は人類全体を救ふなぞとは言つてゐないのだ。(『日記II』41年、全2)

「一般的考察」、「文化」、「歴史」とは超越から離反している内在(「悪い記憶」)である。「小さな些末事」、「個人の経験」、「孤独」、「生活の良心」への超越は、その超越自体においてそのうちに内在すべき「原理」を見出していくことにおいて、内在に連関している超越である。

裁断のない自我はつまらない。言ひ換へるならば行動性のない自我は個性を持たない。自我の裁断によつて把握された行動の原理は、逆に自我を裁断し規定する。行動に束縛されなければ自我は生きてこない。自我を利己的なもの排他的なものとしか考えな

いことはあまりに卑俗な見解である。自我とは飽くまで自己に対する厳格な精神であるべきものだからである。この残酷な本性は、たえず放棄し、たえず拾ひ上げる内部の働きを支配してゐる。目的が如何なるものであるにせよ、自我はさうした働き自体の中に最も強い刺戟と満足を感じるものである。目的は多分に偶然によつて支配せらるるものであるが、自我の働きの過程の中には甚だ

複雑な必然が見られるだけである。そこに於いては懷疑主義はその片鱗だに見当らなくなる。多くの懷疑主義は、感覚の鋭い多様性に基づくものではなく、単なる感覚の混乱とか弱々しい自我に起因するものであつて、合理主義の諸基準すら動かすことが出来ぬものであり、沉んや現実の裁断は思ひも及ばぬところである。しかし、さうした懷疑主義の消滅とてただ主知の始まりであると言ふに過ぎぬであらう。主知はおそらく個性の滅却へと進んでゆくか或ひはその超脱へ向つてゐる。だが最初から滅却或ひは超脱すべき個性すら持つてゐないとしたら、全く問題にならない。

(「圍繞地」41年、全2)

「自我の裁断」(超越)によつて見出された「行動の原理」のうち自我は内在する。自我にむける「自己に対する厳格な精神」||「残酷な本性」||「甚だ複雑な必然」とはこの、内在に連関している超越

である。内在に連関している超越はさらに個性の滅却、超脱、すなわち超越に連関している内在に向つていくとしている。

2 戦後第一期（一九四五年～一九六五年）

この期の鮎川思想において、内在と超越との連関と内在と超越との離反とが併存していると考えられる。

（1）内在と超越との連関

超越に連関している内在と内在に連関している超越とから構成されており、まず前者についてみてみよう。鮎川は詩及び詩作を、「時代によって変化する、一時的なものである、特殊な個別的な経験（超越）を、普遍的、超時間的な精神上の「リアリティ」（実体）（内在）につくりかえること（超越に連関している内在）であるとしている（『日本の抒情詩』48年、全3。『現代詩の分析』51年、全3）。個別な経験を動機（モチーフ）、契機、素材として、自分がそのうちに内在すべき精神秩序を構築していくことであるとしている。

詩を書くことと詩について書くこととの間には相当の距離がある。詩を書くことは、自己の人生観を述べることではない。詩は知性的なものと感性的なものから構成された種々なる統一体を

作ることであり、モラルの世界と感性的な世界が表裏をなして連結される一つの新しい経験の世界である。それは思想を感情によって、感情を思想によって繋ぐ世界である。我々の経験のうちにあつて異質のものが、精神の一段と高い世界に於て同一化される。それは思想と感情の葛藤のない世界であり、一つの中心によって完全な経験の均衡を得た世界である。（『詩人の出発』47年、全2）

「詩について書くこと」、「自己の人生観を述べること」は、既に自己がそのうちに内在している言説を記述することであり、経験（超越）から離反している。詩は、経験（超越）においては「異質のもの」として「葛藤」をもつものが、「一つの中心」をもつ秩序のうちに秩序づけられている世界である。

「すぐれた詩を読んだ時の新鮮な衝撃の底にあるものは、『いままでの世界に欠けていたもの』という実感であります。さらに言い方を変えれば、われわれが現実に対して不満を抱いたり、淋しさを感じたりする、その言い知れぬ空虚は、『その詩』が欠けていたためだといえるような実感です」（『われわれの心にとって詩とは何であるか』54年、全2）。この「実感」は、「その詩」において、経験における「葛藤」が秩序のうちに解消されることからたらされるので

ある。

詩におけるこのような経験（超越）の詩の秩序（内在）への吸収は、人々が内在している世界が共通している範囲が拡大していくことをもたらし、その結果、「過去の社会では、詩人の反逆的自我が閉鎖的にしか作用しなかったのが、今日ではそれが開放性を帯びてきたということ」、「今日の社会が過去の社会にくらべて、言葉のすりかえを必要としなくなったということ、つまり思想的発言がより自由になったということ」になってきているとしている（『現代詩作法』55年、全3）。

現代詩は歌う詩ではなく、書く詩、考える詩、読む詩であるとし、次のように述べている。「ぼくたちの詩が書く詩であるということ、読まれるけれど、まる覚えに記憶されるものではないということ、これは詩としては、実に困難で、かつ苛酷な形式なのです。はたして、どれだけの詩人が、本当の意味でこの形式に、最後まで耐えられるか大いに疑問だと思います。同じ場所にとどまって、歌になることを許さないのですから。したがってぼくらは、たえず新しい対象と新しい形態を求めてゆかなければならないでしょう。しかし、ぼくはこのような形の詩の形式に強い愛着と興味を感じています。なぜなら、それはぼくら自身の生活の姿だと思ふからです。ぼくたちが一篇の詩を書くとする、もうそこから出てゆかなければなら

ない。ぼくたちは、歌という形によって追憶にとどまるよりも、むしろ忘れるために書くのだとも言えます。……もし、その詩を書かなかったとしたら、ぼくたちは『その詩の含まれるべきもの』（詩の契機である経験―引用者）を、決して忘れることはできないと思います。そして、その詩が書けるまで、いつまでもそこにとどまらなければならなくなってしまう。そうした状態が積み重なると、つねに外部に対して積極的に働きかけようとする感情の機能も停止します。そしてやがて精神は渋滞し、ぼくらの生活もその弾力性と活気を失ってしまうのです」（『われわれの心にとって詩とは何であるか』54年、全2）。歌う詩は超越から離反している内在であり、経験から離反して、自分が内在する世界、秩序を構築してしまう故に、深く体験することがない経験の「同じ場所」にいつまでもとどまり続けるのに対し、考える詩においては超越と内在とが弁証法的に交渉、展開していくのであり、経験も詩もたえず変化、交替していくのである。

経験からの詩の秩序の構築における中核的技法は隠喩であるとし、隠喩は言葉の意味を、経験のうちにある意味（超越）から内在すべき秩序における意味に移すとし、そのようにして隠喩が構築した詩の秩序を象徴であるとしている。「詩人にとって、自己の存在を深める道は、経験を詩的象徴に移し変え、詩的象徴を生活経験の分野に

転化し、活用してゆくことにある。詩的象徴とは、詩人の経験のパターンであり、ある価値である。そしてある価値は、経験のパターンの超えた一つの絶対的品質として、われわれの精神に強く働きかけてくる。種々雑多なわれわれの経験が、意味ふかい象徴に転化されてゆく過程は、詩人にとってのみ味わい得る創造の喜びであり、経験をさらに高める潜在的能力を存分に發揮することによって、現実の重圧から自己を解放する作業のためまざる連続である（『荒地』における主題「52年、全2」。この象徴において我々は「感覚を超えたあるリアリティ、すなわち精神のリアリティ」を感じる。「一つの象徴が起きたリアリティを持っているのは、それが詩人の知性とともに感情を伝えるからであり、もしその象徴が知的なものしか表示しない場合は、起きたリアリティとして訴える力に乏しい。なぜなら我々自身の経験は、知的なものばかりで成りたっているわけではなく、常に知識と感情のバランスの上に成り立っているからである」（『現代詩の分析』51年、全3）。象徴は超越に連関している内在であり、象徴のうちに感じる「リアリティ」は、秩序（内在）のうちに吸収された、経験（超越）における感情によって感じさせられているのである。芸術における「象徴的手法」がめざしているものは「人間の内面生活のリアリティ」であるとしている（『汚れなき悪戯』の主題「57年、全4」）。

内面生活を構成する知性と感情について、知性の指導を有益であり、建設的であるとしつつも、生活の大部分を推進していくものとしての感情の強力さを指摘している。感情は経験（内在に連関している超越）であるとともに内面の秩序（超越に連関している内在）である。詩は感情を表現することにおいて、感情を内面の秩序としてとらえる（『精神・言葉・表現』61年、全4）。

この内面の秩序としての感情が外的状況との関係において危機に立つ時、詩はこの感情の秩序を表現、確認することによって、危機を打開しようとするものであることを、高村光太郎について述べている。「氏（高村―引用者）にとって、真に詩を必要とする場合は、きわめて特別な場合ではないか、と私は推測します。その特別な場合とは何かと言いますと、氏が思想的に、感情的に、一つの危機とか転点とかに立った時だと思えます。そういえば、氏の重要な作品は、ほとんど『危機の時』の様相を示しております。……氏にとって『守ろうとするもの』は、非常にはつきりしていると思えます。そして氏は、自らの感情の母胎となっている土着的なもの、民族的なものに、深い根をさしこんでいます。おそらく、『天皇あやふし』と叫んだ感情は、氏の詩作品の全秩序をつらぬくところのものであったでしょう」（『現代詩作法』55年、全3）。高村において、「土着的」、「民族的」なものである「感情の母胎」が危機に立つ時（「天皇

あやふし)、詩は「感情の母胎」を表現し、確認し、防衛するのであり、詩はこの防衛機能に集中してきているとしている。高村に於いての鮎川のこの指摘は、詩が、超越に連関している内在である感情の秩序の上に構成されるとする鮎川の詩観の根拠を明示していると考えられる。

詩、感情の秩序からさらに、生活を基底において支えるべき文明、伝統、歴史を、超越に連関している内在としてとらえている。「われわれの生活は、ヨーロッパやアメリカのような共通理念としての『文明』というものを持っていなかった。伝統の根のないところによく言われる植民地文化の雑草が生えていただけである。守らなければならぬところの文明を持たない民族にとっては、戦争も天災地変のような偶然的災難であったに過ぎない」(『現代詩とは何か』49年、全2)。「植民地文化の雑草」も「天災地変のような偶然的災難」も内在から離反している超越である。超越に連関している内在としての文明の基盤において「戦争」も内在に連関づけられ、必然としてとらえられるのである。

幸いにしてすべての時が現在とは限らないから、われわれは自らの努力によって、この病める墮落した時を贖うことが出来る。もし時をとり戻すことが出来ぬとしたならば、われわれは過去に

於ける自らの罪と過失を贖うことも出来なければ、過去に於ける栄光と価値を継承することも出来ない。それはわれわれにとって未来が存在しないということを意味する。未来が存在しない現在とはどのようなものであるか。死せるものは甦ることなく、生きるものはこれから死ぬのみであろう。……われわれは死者を弔うことなく、死は永遠に死を意味するのみであろう。人間はすべて墓地なき死者となることによって、その文化と称するものの幕を閉ざすことになるだけだろう。

しかしすべての時が現在ではない限りに於て、われわれは(時を贖う)ことができる。われわれは滅びることのない価値というものに信ずることが出来る。「未来は過去の中に含まれる」という言葉(T・S・エリオット引用者)の中には、われわれが歴史と共に滅びることのない永続的価値をすでに見出していることを暗示している……。『現代詩とは何か』51年、全2)

過去は超越に連関している内在であり、現在は超越であり、未来は内在に連関している超越である。「時を贖う」とは、超越を内在に連関させることである。「永続的価値」すなわち伝統とは内在であり、超越に連関している内在である。伝統は「自己の歴史的境位への鋭敏な意識」(超越)にともなって自覚されるものであり、現在への超

越によって変化していくものであるとしている（『日本の抒情詩』48年、全3）。

次に、後者の内在に連関している超越についてみてみよう。鮎川の出発点であるモダニズム、及び鮎川が多大な影響を受けているP・ヴァレリーが志向する「純粹詩の觀念」（詩を生活、社会から分離し、詩を詩以外のあらゆるものから独立させ、詩自体の価値を追求する）を鮎川は批判している。「ヴァレリーは『神は慈愛深く最初の詩句を無償で与える』と言っているが、われわれは、決して最初の詩句からして無償で受け取ることとは出来ない。それにはわれわれの世代の特殊性もあるが、現実から絶えずさまざまな觀念を強制されつつけてきた者にとつて、詩の最初の一句は、新たに生起する現実の生そのものから押出されてうまれてくる。その意味から言つて、われわれは生そのものに固執せざるを得ず、純粹詩の觀念は、われわれにとつてあまりに芸術的に過ぎるのである。われわれの自己証明の場は、觀念の有償性のうちにあるので、『何のために』われわれが作品を書くのか、という問いに対する答えを不断に求めてゆかなければならないところにある」（『ヴァレリーについて』47年、全4）。詩は「新たに生起する現実の生」への超越においてのみつくられるのである。詩は、既に存在している心の内面の秩序のうち（内在）において発生するのではなく、心の外部の現実状況における経験（超

越）においてつくられるとしている。さらに、「我々にとって文学とは、生きるための価値を求める一手段に過ぎない。このことは、しかし決して文学や芸術を我々が軽視しているということにはならぬのである。我々が多少とも信頼がおけると思っている作家、詩人は、いずれも文学を第二義的なものとして取扱っているのである」とまで述べている（『荒地』について、48年、全2）。鮎川において、詩は、現実状況における「生きるための価値」追求（超越）に伴する手段（内在。既存の内面秩序（内在）に帰属）である。

詩を成立させている要素を「現実」と「想像」とし、「現実」に照応するものとして「科学」、「実証」、「観察」、「外面世界」を指摘し（超越）、「想像」に照応するものとして「象徴」、「隠喩」、「幻想」、「内面世界」を指摘している（内在）（『比喩論二題』58年、全2）。後者は前者を実現する手段として機能するのである。「想像力の働きは、ロマンティストの詩人が考えるほど無限定のものではない。その方向は、意識的、無意識的に制限されており、その大きさも、現実の条件によってきびしく限られているように思う」（『浪漫主義と想像力』60年、全2）。後者は前者によって制約されているとしている。以上のような鮎川における詩のありかたは内在に連関している超越である。

鮎川において超越は内在に連関させられることにおいて詩として

達成されるが、しかし超越は内在から離反していこうともしている。連関の枠内において連関と対抗関係にある、超越が内在から離反していこうとする志向についてみよう。ビート派の作家、W・バロウズについて次のように述べている。

『裸のランチ』（バロウズの代表作―引用者）はいくつかの興味深いエピソードから成り立っているが、エピソードといってもそこにはストーリーとかプロットとかいったものはほとんど存在しない。映画におけるストップ・フレームの手法のように、瞬間を凍結停止させ、そこに内包されている影像なり意味なりを伝達するやり方であって、小説全体がそのような情景のモンタージュから成り立っている。過去と未来の「連続性」を断ちきり、あくまでも現在に集中して、さまざまな段階における恐怖のヴィジョンを現出させるのである。

なぜこのように、彼の小説には不断の現在しか存在しないのか。現在がすべてであるという考えはどこからくるのか。これはかならずしもバロウズだけの特徴ではなく、ある程度他のビート派の作家にも共通していることだが、彼らの生き方というものは、現代の社会機構の内部に安住しようとする態度とは正反対のものである。……一歩誤れば奈落の底といった現代生活のぎりぎりの端

つこのところから、現代文明のからくりを覗こうとするのである。……

かくして、ビート派における「連続性」の拒否は、同時代の歴史の拒否に通じてくる。

過去と未来と秩序を放棄して、彼らは現在に集中する。「作家が書くことができるものは、ただ一つ、書く瞬間に自分の感覚の前にあるものだけだ」とバロウズは言う。そして、「私は記録する機械だ」とも言う。

だが、「連続性」を拒否した作品は断片の集積とならざるをえない。すこし古風な趣味の批評家は、これらの作品を紙屑ひろいのバタ屋と同じだと酷評している。しかし、むしろそれらの価値は、その中に含まれた現実性、真実性によって判断されなければならぬであろう。（『ウィリアム・バロウズ』65年、全4）

バロウズ等ビート派の作品において、連関の枠内における内在からの超越の離反は極限に達している。「現在」への「集中」（超越）は「連続性」（内在）を破壊し、現実を「断片の集積」としてとらえる。「断片の集積」としての現実を、相互連関性の欠如した「接続詞のない世界」と表現しており、そのような現実から詩の表現における「腐蝕的、解体的傾向」が生じてきている（『現代詩作

法」55年、全3）。詩人のありかたについて、既製の地図を信用せず、つねに直接「現実」のうちに道を探索していくとしている（「恐怖への旅」56年、全4）。「事実」は、われわれの存在より永続するところの、この世の唯一の成長的なエネルギー源である。真理は、この源泉からのみくみとることができる。この意味で、真実を求める人間にとつて、まず必要なのは事実、に直面する勇氣ということにならう。そのためには、どうしても客観的に物をみる力が必要となる」（「自伝の真実について」59年、全5）。「われわれの存在」（内在）より「永続」する「事実」に直面し、「客観的」にとらえることは、連関の枠内において内在から離反する超越である。

「言葉への不信は、自己の経験への不信でもある。それは更に、すべての哲学の虚しさを知ることであり、詩のために利用する真実なるものの空無を悟ることである。……荒地（現代の荒廃した状況——引用者）に於ては、言葉への不信は、むしろ活力の源泉であった。権威も伝統も常に不安定に見え、我々の生きるに先立つ幾世代かの精神的遺産は、現代の荒地に逢着して無への解体を始めているように思われた」（「詩人の出発」47年、全2）。言葉、精神的遺産（内在）への不信とは、超越における内在からの離反である。創造するためには、「過去のすべてをなげすててしまふ勇氣を持たなければならぬ」としている（「現代詩に求めるもの」60年、全2）。

……人間というものが、第一不変のものでなければ、事物を測る確実な尺度ともなり得ないのである。尺度は常に自己の外に於て、見ることの出来るものでなければならぬ。印象批評に対する客観批評、科学批評の功德は、事物を測る尺度を自己の外部に於て確かめた基準に従つて「世界」を規正してゆくことにある。

自然と人間との間に隙間をつくるということ、——そのことによつて得た客観的尺度は、個性依存から個性滅却へ、我々の精神を単に内在的なエモーションから更により高次の段階へと導いてゆくものである。……

……詩とは認識にかかわる一個の特権的装置であるに過ぎない。それは自己を対象化する働きと、対象を精神化する働きの全面を含み、さらにその世界に超越する他の精神によつて「一つの中心」を認識しようとする言葉への祈りでなければならぬ。（「暗い構図——囚人に関するノオト」47年、全2）

……私には、詩は同じ意味の散文よりも美しく、その上に明確な論理的意味以上のものを含み、且つ伝達し得るように思われるのである。何のために我々が詩を書くかといえば、結局そういった詩の機能が我々の経験の再組織に役に立ち、言葉の全体的な運

動の統一された秩序の中に、我々の存在を満たすところの映像を、つまりわかりやすく言えば人生の形を見るのである。詩とは、抽象的なものを高めて具体的な形を与えることであり、経験に光る固さを与えることであり、観念に場所を与えることであり、喜びや悲しみや怒りに物質的感覚を与えることであり、*etc.*そして最後に個性を消滅させることである。

個性の消滅とは、個人的特異性乃至気質や主観的な実感の消滅へ向うという意味である。詩は歓喜でもなければ絶望でもない。

——そうした作者の実感とは凡そ縁遠い。知的作業によって形成されるものである。……表現とか描写とかいった散文的要素は、詩の方法論のうちにはあり得ぬのである。詩人は原則として言葉によって表現したことはあつても、表現しよう、と企てることはない。彼はただ沈著に冷静に歌うように〔書く〕だけである。（批評の限界」47年、全拾）

「客観批評」（超越）は「世界」（内在）を「規正」する（連関）とともに、「印象批評」（内在）から離反する。「個性依存」（内在）から「個性滅却」（超越）が離反する。「自己を対象化する働き」（超越）は「対象を精神化する働き」（内在）に連関するとともに、それから離反する。散文においては、「論理的意味」、「抽象的なもの」、

「経験」、「観念」、「個人的特異性乃至気質」、「喜び」、「悲しみ」、「怒り」、「歓喜」、「絶望」等の「主観的な実感」を「表現」、「描写」する。既に内在しているものを「表現しよう」とするのである。詩においては、「抽象的なもの」、「経験」、「観念」、「喜び」、「悲しみ」、「怒り」（内在）に、「具体的な形」、「光る固さ」、「場所」、「物質的感覚」（超越）が連関するとともに、超越は内在から離反する。超越を「表現しよう」と予定することはできないのである。

連関の枠内における内在からの超越の離反についてみてきたが、この離反と対抗関係にある、内在に連関する超越についてさらにみてみよう。

「強烈な夏」（八束龍平の詩―引用者）には、他のどんな言葉によってもぐらつかない固い言葉があり、それが眼に浮ばぬような架空の像や観念に依るのではなく、事物、事態、状態の存在性に根ざしている。……存在に固執する精神が、「卑猥な匂い」や「焦げくさい臭気」や「バリバリ」という音をペン先で突きあてたのである。逆にこうした言葉は、そうした精神そのものに抵抗してくるから、作者はただ自分の全身をその言葉にこすりつけることによって、詩の存在を証明しようとするようになるのである。表現とはそうした作業の謂である。それは精神をめりこませたり、精

神をひっかいたりすることであっても、言葉のある感情の符号として操ったり、描写的手法によって自然の代用物を得たりすることではない。（「囲繞地」47年、全拾）

「影」（三好豊一郎の詩—引用者）を読むことによって、我々は詩人のエモーションよりも、自分のエモーションを鋭く感ずる。殆んどすべての秀れた詩がそうであるように、この詩の内容とすべきものは言語によって暗示される感覚映像の中に窺われるのではなく、言葉そのものの性質の中に、言葉の持つ作用の全的な働きの中に横たわっているのである。言葉に対する不信が、却って真の言葉、——新しい精神に合致する新しい言葉を生む。（「詩への希望」47年、全4）

言葉（超越）は「感情」、「自然」、「感覚」、「映像」を指示、描写するのではなく、「事物、事態、状態の存在性」に根ざそうとする（「言葉そのものの性質」、「言葉の持つ作用の全的な働き」）。詩人の精神（内在）も存在性を志向し、言葉に対する不信をもちつつ、言葉を模索し（「こすりつける」）、言葉の方も精神のあいまいさを明確化しようとする（「抵抗」）。詩は、精神（内在）に連関している言葉（超越）である。

「存在性」に根ざそうとする「言葉の持つ作用の全的な働き」が

発動される詩の中核的技法は隠喩であるとしている。直喩が「……のような」という表現形式に閉じこめられているのに対し、隠喩においてはそのような形式はなく、比喩という機能からも自由になり、言葉の意味を通常の意味から「存在性」に根ざした意味に移すとしている。通常の意味は内在であり、「存在性」に根ざした意味は超越であり、隠喩は両者を連関づけているのである（「現代詩作法」55年、全3）。

鮎川は自分達が志向する文学を、私の文学ではなく、我々の文学であり、我々とは「同類」であるとし、さらに次のように述べている。

しかし「我々」の各個人は、同類を如何に所有していても常に孤独である。孤独とは状態の謂ではない。一人の男が何かの意見を述べ、その周囲の者が彼の意見に共感している時でも彼は孤独なのである。何故ならば、我々にとつて同類とは集団ではなく、決して我々のすべての行為が思想上の、又は生活上の共通の主義によつて統一されているわけではないからである。我々は各人が夫々の仕方によつて、自己証明の場を求めてゆかねばならぬし、我々が到達した確信とはただそれだけであるから、彼が同類に向つて何かを訴えたいという衝動が大きければ大きいほど、彼の孤

独が大きく口をひらく。

彼が自分の周囲の者に語っているように見えても、ひそかにまだ面識のない誰かに向けて喋りかけているのかも知れない。我々の各人は同類を日々に新しく獲得してゆく努力、——新しい作品を書いたり、観念の奪い合いをしたりする一見無駄な努力によって、次第に自己証明の領域を広く深くしてゆき、まだ面識のない誰か、未来の輝かしい人間に向けて語る言葉や書きあげられた一篇の作品を、真に完璧なものとしてたいと希っているかもしれぬのである。（『批評の限界』47年、全拾）

自分への孤独な内在があり、他者への超越があり、内在を超越に連関づけている連関としての「我々」、「同類」、「自己証明」がある。「『孤独とは何かを訴えたいという衝動のうちにある』という田村隆一は、人に何かを訴えたいという衝動を強く感ずれば感ずるほど、自己の孤独を拡大してみせるより仕方がなくなる」（『圍繞地』47年、全拾）。「何かを訴えたいという衝動」は孤独（内在）に連関している他者への超越であり、孤独への内在が深められるにしたがつて、他者への超越が孤独への内在に連関していくのである。

鮎川は詩「アメリカ」（47年、全一）について次のように述べている。「私はこの作品でかなり烈しく剽竊をやった。言葉を自発的に受

取る方が、そしていわば我々のなまのままの刻印のある言葉の方が私に強く役立つように思われたからである。そしてその私の存在のうえに記された言葉の証跡からなるべく元の形をこわさぬようにした。我々がじかに読んで言葉の現実的な強制力を感じる場合に忠実に従って……。私は断片を集積する。私はそれらを最初は漂流物のように冷やかに眺めているが、次第にそれらの断片によって我々の世界が支えられていることに気づく。私はそれらの断片に、総括的な全体との関聯に於て、部分としての位置を与える」（『アメリカ』覚書、47年、全一）。「アメリカ」のうちに組みこまれた他者の詩句への超越は鮎川自身の孤独への内在と連関し、「アメリカ」全体を構成していく。「剽竊」とは、「現実的な強制力」をもつ他者の詩句を「自発的に受取る」超越である。

次に、以上のような内在と超越との連関に依拠して、内在と超越との離反を批判する鮎川のありかたについてみてみよう。まず内在から離反している超越に対する批判をみてみよう。近代及び近代の帰結としての現代を、T・S・エリオット、ダント、田村隆一を参照しつつ、土地、家（庭）、仕事を持たない根無し草の人間の世界、死ぬことのできない世界（「生きることのできない世界」、生きながらにして死せる存在であることを意識していない人間の世界としてとらえている。現代の二度の世界大戦は巨大な物質上の破壊を遂行

したのみならず、言葉と想像力をも破壊し、現代人は相互に共有すべき言葉、精神の世界を失っているとしている（『恐怖への旅』56年、全4。「地獄の発見」52年、全4）。実体、自然である内在を喪失し、外的環境に対する受動的対応としての超越に終始しているのである。

近代、現代の思想的核心であるヒューマニズム、及びその後継者であるロマン主義、シュールレアリズム、マルクス主義を、内在から離反している超越として批判している。ヒューマニズムとは神からの人間の脱出であり、人間の欲望の肯定、美化であり、人間の恣意への一切の従属であるとする。「神がないとすれば」というドストエフスキの仮定が、『神はない』とする近代ヒューマニズムの断定にとつてかわった時、人間は自由に放浪しはじめたが、同時にみずからの魂の住居を失ったのである」とし、さらにT・S・エリオットを支持しつつ、「エリオットの伝統主義も近代ヒューマニズムに対する幻滅から生れた。ロマンティズムの文学が個性を不当に重んじようとするのに対して、彼はその無力を充分に知っているがゆえに、そうした態度をしりぞけて、逆に非個性説をとなえるのである。ロマンティズムは、宗教・倫理の絶対的価値を危くし、それらを流動的な勝手な解釈で、个性的な異端のもとに隷属させてしまふ」としている（『燼灰』のなかから）47年、全4）。欲望、恣意、個性、異端は内在から離反している超越である。シュールレアリス

ムについては、「かれらは詩における『意味』というものを追放してしまいました。そして過去の美学との断絶がそのいちじるしい特徴であり、そのことは同時に、過去の文化的遺産の一切との断絶を意味しております。しかし、シュールレアリストの表現の方法は、『異質のもの、あるいは異質の〈観念〉の暴力的結合』であり、そこには〈秩序〉の意識が全くないのです」としている（『現代詩作法』55年、全3）。「暴力的結合」は内在から離反している超越である。マルクス主義においては一切の内在が失われ、内在から離反している超越である階級闘争のみが存在しているとしている。

近代日本の詩、詩人のありかたを内在から離反している超越としてとらえている。「我々が思想的に祖先を持つていないということとは、我々の国では文化的伝統の〈真価〉を客観的普遍性に於て確かめることが出来ぬということと併せて、我々の世代の不幸な特徴と言える」とし、ここから、「我々が人生を受身で考えることを強制され、其処から一步も外へ出ようとしなかった」ことがもたらされているとしている（『犠牲になった世代』不明、全4）。内在（「祖先」、「文化的伝統」）の喪失において「受身」で考えざるをえない（内在から離反している超越）のである。「歴史をつくり出す力が外部から作用することはあっても、詩人の内部で働きつづけてきたとはいえない」のであり、外国の詩の影響が流入する場合、「いままでの詩に欠けて

いたものを強く意識することによって、急速にその間隙に流れこんでくるようなかたちをとる」のであり、「しかも、その流れを受けとめる内部がなかった」のであり、「いつでも運動は、進歩という観念と混同して受けとられてきたけれども、実際はリアクションにつぐリアクションの連続であった」のであり、「どの運動も卵のまま腐ってしまっただし、どの詩人もその仕事を十分に内実^{（元）}させないうちに、立枯れてしまったようにみえる」のであり、「すべての芸術運動を『流行』という概念で割切って考えた春山行夫のような詩人がいたことも偶然ではない」のである（『戦後詩人論』55年、全4）。内在（「内部」、「進歩」）が喪失している超越（「外部」、「間隙」、「リアクション」、「流行」）をとらえているのである。戦中期の戦争讃美の詩、愛国詩をモダニズム、左翼の詩人が書いていった心理、戦後の『死の灰詩集』等の進歩派運動詩への結集への心理を大勢に乗り遅れまいとする心理（内在から離反している超越）としてとらえている。

次に超越から離反している内在に対する批判をみてみよう。近代人、近代詩人の基本的ありかたは、外界から離脱し、内面世界に内閉すること（超越から離反している内在）であるとしている。近代の抒情詩について次のように述べている。「抒情詩は、エリオットのいう第一の声、つまり作者が自分自身にむかつて語る声（独白）を基調としていますから、必然的に実作者の個性の内がある観念

が、適当な素材と結びついて生れてくることが多いようです。そして、作者の個人的体験が、ユニークなものであればあるほど、その声が強いアクセントをもつてきます。このような抒情詩固有の性質は、個人的観念が発達してきた近代において、特別な意味をもっており、前代の叙事詩、劇詩にかわって近代詩の主流となつたかわれも、近代文明の発展形態と相即的關係にあることは明らかです。しかし、十九世紀のロマンティズム末期以後は、こうした個性主義がだんだん極端になってゆき、遂に作品価値は、詩作の基盤である共同社会からきりはなされ、共同体験から離反する程度が大きいほど、かえってそれが独創の名の下に奨励されるといったような現象さえ招くことになりました」（『日本の抒情詩』48年、全3）。日本の近代詩においてもその主流は抒情詩であり、その基底のうちに現実からの逃避、感傷への逃避を見出している。

近代のヒューマニズムについても、完全性を持つとされる人間性の中に内在し、外界への超越から逃避することとしてとらえている。現代における誠実とは「罪悪からの逃避」あるいは「不道徳に対する恐怖心」であり、「いわば誠実たり得ないことを恐れる者が現代に於ける誠実な人間のタイプであつて、罪悪そのもの、道徳そのものに身を以て衝き当ってゆく積極的な誠実者はいない」としている（『現代詩とは何か』49年、全2）。この現代の誠実は、他者、社

会への責任（超越）を欠いた誠実への内閉（内在）である。さらに黒田三郎に見られる、小市民、庶民、民衆の位置に自分を置くことによつて自己を正当化しようとするありかたは、小市民、庶民、民衆の物神化（超越から離反している内在）におちいつているとしている（「詩人と民衆」56年、全2）。

詩、芸術における人間の経験の全体を解体し、審美的な部分的な機能、あるいは政治的な部分的な機能のみを詩、芸術に求めるありかたを「純粹主義」としてとらえている。フランス象徴主義、及びシュールレアリズム以降の様々のモダニズムは審美的、芸術至上主義的な「純粹主義」であり、マルクス主義芸術は政治至上主義的な「純粹主義」であるとしている（「荒地」について、52年、全2）。「純粹主義」者はそれぞれの芸術至上主義、政治至上主義のうちに内在し、経験へ超越することを放棄するのである。

日本の近代、現代の詩人における、超越から離反している内在として自然への自己の同一化、伝統への回帰を強調している。自然への同一化については『四季』派、西脇順三郎、北村太郎を指摘している。『四季』派の伝統的な美意識、情感への依拠と西脇のそれらからの脱却は対蹠的であるが、人間の現実の総体（超越）から自然への逃避（内在）、文明への諦観は共通しているとしている。戦争讃美詩を書いた『四季』派を、「戦争をも自然現象のように扱い、山川草

木に自己の感情を仮托する如く戦争に自己の偏狭な愛国心をとかしこんだ自然詩人」とし、自然への内在の深さを強調している（「三好達治」47年、全4）。

北村太郎について、その詩の歩みにおいて「生の意味」を問い続けた果てにおいて、「内心のドラマも葛藤も、まぼろしだったにすぎない」、この人生には大きな意味はないという境地へ到達したとし、最近作「冬へ」の世界を、「ここでは、もう他者ははじめから存在しない」、「メタモルフオーシスがあるとすれば、自然へのそれだけである」ととらえている。北村の詩を、「他者を発見しようとして発見しえなかった詩」（超越の挫折）としてとらえ、その根本の構えについて、「人間の意志よりも自然の意志を大きく見ていた」（自然への内在）としている（「北村太郎」66年、全4）。

伝統への回帰については、近代の日本人とりわけ詩人において日本の文化的、民族的、国家的伝統が最も依拠（内在）できる「ポデイ」（実体）であり、詩人においてこれらの伝統が依拠すべき「ポデイ」であることが自覚されたのは太平洋戦争期であり、戦争期において『四季』派も、村野四郎等のモダニストも、左翼系詩人もこの自覚に到達したとしている。彼等のこの到達は政治的強制によつて強いられたものではなく、彼等はこの伝統のうちに積極的に深く内在していたのであるが、同時にこの内在は状況、経験の総体への超

越を欠落させていたとしている。前述のように、鮎川は伝統は超越に連関している内在であり、「自己の歴史的境位への鋭敏な意識」(現在への超越)によって自覚され、変化していくものであるとしているが、『四季』派には現在への超越がなく、伝統を「固定したものの、動かないもの」としてとらえたとしている(「日本の抒情詩」48年、全3)。さらに詩人のみならず日本人全体において日本の伝統、愛国心への内在は世界、状況への超越を欠落させているとしている(「現代詩とは何か」51年、全2)。

近代日本の詩全体を次のように批判している。「今度、明治以降のたぐさんの詩を読んでみて、つくづく日本の近代詩人のスケールの小ささということを考えさせられてしまった。みんな善良な心の持主だし、それぞれ芸術に対する立派な趣味を持っているけれども、あえて不満を述べれば、みなあまりにも自己に忠実でありすぎるとおもう。みんな自分の『善良な心』とか『立派な趣味』の犠牲になっってしまった。ありていに言えば、自分自身に対する懐疑がなく、そのために自己を本当に生かしきっていない。『善良な心』も『立派な趣味』も、一步離れた位置から眺めた場合、単なる利己心であり、俗悪古風な趣味であることに、思い至らないかのようだ」(「日本の抒情詩」48年、全3)。「一步離れた位置」からの「自分自身に対する懐疑」(超越)を欠落させた、「善良な心」、「立派な趣味」へ

の内在におちいつているとしているのである。

以上、内在から離反している超越及び超越から離反している内在に対する鮎川の批判において、前者の批判の対象も後者の批判の対象も近代、現代の世界及び日本における詩、芸術、思想、人間、社会のありかたであり、これらの対象において内在から離反している超越のありかたと超越から離反している内在のありかたとは分離して存在しつつ、相互補完的に存在しているととらえられていると考えられる。

(2) 内在と超越との離反

超越から離反している内在と内在から離反している超越とから構成されており、まず前者についてみてみよう。超越から離反している内在とは、観念から離反した実体への内在である。一般にそうであるように、鮎川においても女性との関係において親和(内在)と異和(超越)の両契機がある。詩「淋しき二重」(50年、全1)において、「ぼくがあなたを信じないように／あなたはぼくを信じようとして／二人の関係は異和であり、「ふと血の気のうせた顔を見あわせて／ぼくたちは汚れを知らぬ微笑をうかべる／ぼくたちが生れるずっとまえからそこにあつた微笑を！」における生誕以前に遡及する二人の関係は親和である。詩「裏町にて」(51年、全1)において、「——憶えているかい？——ああ、あのことね。／すっかり忘れた

んだな？／——そう、あなたは誰なの？」は異和を提示し、「じめじめした屋根裏では、／生パンなまでさえ死の匂いがある。／——生きましようよ、ねえ、／——おれはおまえをいれる立棺だよ。」は死における親和を提示している（「立棺」は直立した死体を入れる棺）。いずれにおいても異和と親和は離反している。このような女性との関係に近親性を導入し（母との親和）、さらに死を導入する（亡姉との親和）ことにおいて、異和は除去され、親和が純化される（超越から離反している内在）。詩「秋のオード」（48年、全1）において、「この世のそと」（死）における母との結合が提示され、詩「姉さんごめんよ」（47年、全1）、詩「落葉」（49年、全1）、詩「あなたの死を超えて」（52年、全1）において、死の世界における夭折した姉との結合が提示されている（虚構。鮎川に姉はいない）。

この期の鮎川の詩には、いかなる意味づけ（超越）をも拒む、「絶対性の風景」というべきもの（超越から離反している内在）がしばしば提示されている。「あらゆる行為から／一つのものを選ぼうとすると／最悪のものを選んでしまうことには／いつも個人的なわけがあるのだ／だから純潔を汚すことだつて／洗濯したてのシャツをよごすほどにも／心を悩ますことはないのだ／教授にとつての深淵が／淫売婦には浅瀬ほどにも見えなかつたりするのだ／ポケットのマッチひとつにだつて／ちぎれたボタンの穴にだつて／いつも個

人的なわけがあるのだ」（「橋上の人（第三稿）」51年、全1）。行為は「個人的なわけ」のうちに内在し、他者に理解させること（超越）は不可能なのである。「孤独な彼の横顔は／じぶんの不幸を悲しんでいるわけではない／まして夢を見ているわけでもない／橋にもたれてぼんやり煙草をすつている／明日もなければ今日もない／それだけの運命である」（「風景」不明、全1）、「無意味な時代がしずかに腐敗しています」（「白痴」48年、全1）には、意味を喪失した「運命」、「時代」が提示されている。「深いふかい眠り」（54年、全1）には、人間としての覚醒以前、罪の発生以前の「水平線の無い世界」への回帰が提示されている（「水平線」は超越の目標）。

次に、後者の内在から離反している超越についてみてみよう。内在から離反している超越とは、実体から離反している観念への超越である。この超越が詩の骨格となっている詩として「アメリカ」（47年、全1）、「橋上の人（第二稿）」（48年、全1）がある。「アメリカ」においては、発見されていない「われわれのアメリカ」、「新しい黄金時代」、「至高の言葉を携えた使者」が、実体から断絶したものとして「熱烈に」夢みられている。「橋上の人（第二稿）」においては、超越への志向が多彩に提示された後、最終連において、「美の終局には／方位はなかつた／花火の夢も泉もなかつた／自然の声も流れゆく雲もなかつた／風は決してあなたに囁やいたりしなかつた／暗く

なつた眼のなかに／なほもとほくを望みながら／彼岸になにも見えなかつた」と、超越への志向は内在（実体）から離反しているとしている。これらの詩において内在からの離反は超越への志向を強めている。

内在から離反している超越を構成するものとして死への志向と罪の自覚がある。死への志向を提示している詩として、「耐えがたい二重」（46年、全1）、「日の暮」（46年、全1）、「死んだ男」（47年、全1）、及び病院船日誌詩篇（「病院船室」47年、「海上の墓」53年、「サイゴンにて」53年、「遙かなるブイ」53年、「なぜぼくの手が」53年、「神の兵士」53年、「出港」53年、「消えゆく水平線」53年、「港外」53年、「水平線について」54年、以上全1）がある。「耐えがたい二重」では、「髭だらけの死者」（戦死者）である自分と、それを見つめる自己という自己の「二重」化（分割）が遂行されている。「日の暮」では、現実の戦死者である親友森川義信、「M」が導入され、「死んだ男」では、自分を「M」の「遺言執行人」として位置づける。「M」がいる「高いところ」（死）へ超越しようとするのであり、「信ずるに足りない」生の現実（内在）から離反しようとするのである。病院船日誌詩篇では、「兵士」は、現世において人間に与えられ、人間がとらえられてしまう「神様」、「悪魔」、「聖なる言葉」、「神の報酬」、「崇高な死」、「歴史」（内在）を拒絶し、「神様」から「脱走」

して、「永遠」に死んでいく（超越）。「自己という病いから癒えるために、死んだ友（森川―引用者）のことを考えることは、私には一つの救いになったとおもう。いつも詩を一種の遺書と見做すような気持が私にはあるが、それもおそらく彼のせいだろう」（森川義信I）58年、全4）。私は『死んだ男』を、戦争で犠牲になった死者一般の象徴とはとらなかつたし、あくまでも単独者（森川―引用者）として考えようとした」（戦争責任論の去就）59年、全4）。「自己という病い」（内在）から離反するために、死者である森川へ超越するのであり、鮎川の詩は、現世から死者森川へ超越する「遺書」なのである。また「死んだ男」を「死者一般」（内在）とすることは、鮎川自身を内在させることになるのである。

罪の自覚とは倫理秩序（内在）に対する違反の自覚（超越）であり、自分が有罪であることを自覚しつつ倫理秩序を保持しようとする向することは超越に連関している内在であり、鮎川のように自分が有罪である外はないと自覚することは内在から離反している超越である。「われわれは、われわれの救いがたい悪や、惨めさや、社会的邪悪に直面して、まずわれわれ自身が罪人であることを意識せざるを得ない。如何に社会的制度とか機構に欠陥があるにせよ、みずからこの社会に生きている以上は、われわれが無垢な人間であり得ようわけがないからである」（「現代詩とは何か」50年、全2）。「われ

われ」は、「社会的制度」、「機構」（内在）から離反して、罪へ超越しているのである。「近代生活の倦怠から脱出するためには、人間の根本悪を認め、罪の伝承を信ずることが必要であり、ともかくも滅亡の可能性ぐらゐは擱まねばならぬ」（『荒地』について、48年、全2）。人間における根本的有罪の自覚から、近代主義、ヒューマニズムを批判し、原罪に依拠するカトリシズムに接近している（「詩人の出発」47年、全2）。

詩「兵士の歌」（55年、全1）において、自分を、「なにものよりも おのれ自身に擬する銃口を／たいせつにしてきたひとりの兵士」とし、「誰もほくを許そうとするな」と呼びかけている（自分の有罪を確信）。また、「死の穫りいれ」（死への超越）が完了することにおいて出現した「曠野」を自分は「ながいあいだ」「夢みてきた」とし、この「曠野」を自分は「孤独」のうちに歩いていこうとする。罪と死とが、内在から離反している超越として結びつけられている。

『私』は人生に対して幻滅的な考えを抱いてはいるが、決して絶望してはいないのである。『私』は生を生として執着的に生きることに、もはや何の希望も抱いてはいないが、生の中にいわば超越的な、超時間的な死を呼び込むことによって救われることを信じ、必ずしも生に絶望してはいないのである（「現代詩とは何か」50年、全2）。「生を生として執着的に生きること」（内在）から離反し、「超越的

な、超時間的な死」へ超越しようとするのである。鮎川は現実の日常生活、職業生活（内在）と詩人の営為（超越）とを全く対立するものとしてとらえており、詩を書くことは日常生活から離反することであるとされている（「現代詩人の運命」51年、全拾。政治、ジャーナリズム（内在）からも詩作は離反している」とらえられており、それらに対する不関与の態度が形成されてきている（「政治嫌いの政治的感想」61年、全5）。

最後に、鮎川における父との疎隔、先行世代の詩人への批判のうちにある内在と超越との離反をみてみよう。鮎川の父は、戦前・戦中期は農本主義者、軍国主義者であり、敗戦によって打撃を受け、戦後は新興宗教に凝り、一九五三年に死去している。鮎川と生前の父との対立は激しく、憎しみあっていた程であり、鮎川の行動、志向は全て父の反対方向に向っていた。文学好きの鮎川の母も、文学を軽蔑していた父とは疎隔していた。しかし鮎川は、父の死後鮎川の詩作が衰弱していったとし（『現代日本名詩集大成』創元社、一九六〇年）、またかなり後年の回想であるが、「放っておけば内向的になかならない少年の私を、無理にでも時代や社会にむかって眼をひらかせたのは、私の父であった」としている（『時代を読む』あとがき、85年、全6）。父の生前においては、鮎川の詩、評論の志向が父の志向と反対でありながらも、そこにおける内在と超越との連関

は父に負っていたのであり、また同時に鮎川は父へ反逆し、母、亡姉への結合志向を包含した、内在と超越との離反をも志向していると考えられる。父の死後、父の喪失において内在と超越との連関は衰弱していった（詩作の衰弱）と考えられる。

鮎川は、先行世代の詩人が戦中期に戦争讃美の詩、愛国詩を書いたことのように、大勢に乗り遅れまいとする心理（内在から離反している超越）、日本の文化的、民族的、国家的伝統への依拠（超越から離反している内在）をとらえているが、この心理、依拠におちいった構造的要因を究明し、克服していくことをしなかったことを自己批判している。先行世代の詩人に対する鮎川の批判の主眼は、「現代社会の趨勢や思想的動向に逆らっても、内なる自己の世界——彼自身の生命の源泉的な感情の世界に戻ってゆかなければならない」（「詩人への報告」54年、全4）というものであり、当時の「政治主義や集団の権威」に對置された「内なる自己の世界」に依拠することを主張したのであった。しかし、「内なる自己の世界」への依拠とは、先行世代にとっては、戦中期における伝統への依拠であり、超越から離反している内在であった。鮎川の批判は、当時の鮎川自身のありかたのうちにある超越から離反している内在を先行世代に要求するものになっている。このような超越から離反している内在への埋没を克服し、内在と超越との連関、離反を統合する視点から、

戦中期、戦後期の先行世代、鮎川自身を批判すべきであると自己批判しているのである。私の発言の根柢には真の意味での連帯感がなく、その歪んだ戦時体験には、ほとんど伝播性がない」のであり、鮎川の批判は「内なる人の孤独」（内在と超越との離反）にのみ依拠していたのであった（「戦争責任論の去就」59年、全4）。

3 戦後第二期（一九六五年～一九八六年）

この期の鮎川思想において、内在と超越との連関と内在と超越との離反とが併存しながら、次第に離反の比重が大きくなり、中心になっていったと考えられる。

（1）内在と超越との連関

超越に連関している内在と内在に連関している超越とから構成されており、まず前者についてみてみよう。詩が内在と超越とによって構成されているとし、内在を超越よりもより中核的であるとしている。「どんな状態で詩を書きはじめにせよ、私は、私に達するよう書く。しかし、達せられた『私』は、むしろ、現実の私ではない。二つの私の像が重なるには、多少意識の時間が必要である。両者の間隙が大きければ、より多くの意識の時間が必要である。そして、二つの私の像が重ならなければ、たとえ私が書いたものだとし

でも、私にとつては私の作品とはいえないのである。……現実の状況にうながされて、というように、原因（詩作の原因―引用者）が現実のほうからやってきたということはほとんどなかった。その意味では、私の生活にとつて、詩は必要から最も遠いところにある。逆説的にいえば、そうでなかったら、私は詩を書く必要がなかったであろう」としている（『意味への意志』69年、全2）。「達せられた『私』は内在であり、「現実の私」は超越であり、両者は重なるにしても、完全に一致することはない。鮎川において詩作の原因は内在であり、超越は内在に随伴してくるのである。「詩の言葉は、意識の反省的な次元において形づくられるものであるから、現実の行動とは直接的には結びついていない。そのかわり、言葉は現実の諸制約から解放されて、きわめてフィクショナルな、想像的に混沌とした状態におかれる。……読者にとつて一篇の詩の与える感動は、全体的なものである。それは、部分的なよさが積み重なって大きな全体となるといったようなものではなく、むしろ、はじめから大きな全体として、読者を襲撃する。部分に気がつくのは、ずっと後であるといつていい」としている（『現代詩についての23章』69～70年、全7）。詩は、「意識の反省的な次元」においてつくられる、「フィクショナル」な「全体的なもの」（内在）であり、「現実の諸制約」のうちにある、「部分」としての「現実の行動」（超越）からは独立

しているのである。

「私の詩はつねに自己の感情を調節し、制御し得るもの、という前提のうえに立っている」とし、「そうした前提には自己の感情に対する根強い不信がわだかまって」いるとしている。感情は容易に調節、制御しえないものであり、そのような感情に「隷属している（内在から離反している超越―引用者）うちは、個体の全人的な生き方が損なわれる」とし、「自分で自分の感情の裏におちこむようなことを最も警戒してきた」としている（『鮎川信夫全詩集』刊行に際して「68年、全7）。感情への超越を調節、制御すること（超越に連関している内在）として詩があるのである。

しかし同時に詩は、「何ものかによつて核となることばの胚種が植えつけられるのを待つといった、空白とも混沌ともとれるような」受動的な意識状態、「どこからか聞こえてくる他者の声に耳を傾けているといった状態」、「遠くをさまようトランスに近い状態」を通過してくるともしている（『意味への意志』69年、全2）。これらの状態は超越であり、詩における内在は超越を随伴しているのである。道徳、教養のうちにも、超越に連関している内在を見出ししている。道徳は、個人が内在している精神界に依拠して、現実状況に対する判断を下す（超越）ものであり、困難な営為であるとしている（『三浦和義』擁護論を一蹴する「85年、全7）。津田左右吉の教養におけ

る「ぼんやりした知識（専門の精密な知識ではない知識—引用者）の空気の濃厚」さを、状況判断、学問上の発見（超越）がなされる基盤（内在）としている（「一人のオフィス」66年、全5）。

社会、国家、家族等の集団のうちにも、超越に連関している内在を見出している。市場の自律的な秩序維持能力（超越に連関している内在）を基本的に信頼するアメリカの新保守主義に肯定的に着目している（「思想と幻想・確認のための解註」81年、全8）。地下鉄千代田線の車内暴力事件において現場で暴力を阻止することはなかったが、後から「犯人を憎む六十二人もの証言者」が出たことは、「市民社会がモラル・センス（超越に連関している内在—引用者）を失っていない証拠」であるとしている（「車内暴力」85年、全6）。「戦後の日本人は、天皇によって助けられたのであり、そのことを特に言いたてなくともよいことに、安らぎを覚えます」とし、戦後の象徴天皇制は「本来の在るがままの姿」（内在）であるとしている（「皇太子をめぐるアンケート」84年、全6）。日本人において、日本人同士は同じ国家に属するというよりは血縁で結ばれているとらえられていること（内在）を指摘し、中国残留孤児の問題においても政治には機能せず、「ある程度自然（内在—引用者）にまかせる」べきであるとしている（「単独者からの位相」84年、全5）。家族の崩壊の問題に対しても、「人間性の自然（内在—引用者）」とい

うものがあるから、やはり夫婦ならお互いに身を寄せ合おうとするし、親子なら自然に備つて相互依存性があるでしょう」とし、無限に崩壊していくことはないとしている（「私のなかのアメリカ」84年、全5）。

次に後者の内在に連関している超越についてみてみよう。「詩にかぎらずあらゆる文学作品」は、経験（内在—引用者）を超越するための一手段である。……この場合の超越とは、何を意味しているであろうか？ まず、個体にとつては、経験に囚われた状態からの脱出を意味している。……客観的には、それは、個人的な経験を他者にとつて『意味』のあるものにすることにほかならない。……それは普遍性のほうに向つて打返す行為といえるかもしれない」とし、さらに「このような表現行為の基底にひそむ超越への志向」は「自己のなかにひそむ『他者』」に到達しようとするとしている（「現代詩についての23章」69〜70年、全7）。戦後第一期では詩において経験は超越としてとらえられ、内在と連関しているが、戦後第二期では詩において経験は内在としてとらえられ、さらにその内在からの超越が志向されている（内在に連関している超越）。第一期に比べ、直接的経験から他者、普遍への超越への志向が強められ、明確化しているのである。「自分というものから抜け出す努力も必要です。過去の体験に拘泥することなく小さな自我をすてて、むしろそうい

う個性の桎梏から抜け出そうと試みるべきでしよう」としている（『日本の抒情詩』68年、全3）。

戦後第一期にはなかつた政治、軍事についての時評が活発に書かれている。政治に対する態度が嫌悪、軽蔑、無関心であった第一期から大きく変化している。文学者が政治家を馬鹿にし、文学が政治から独立していることを強調することを批判し、政治の重要性、文学の政治への従属の現実、政治家の能力の文学者に対する優位の事実を指摘している（『崩壊の検証』82年、全8。「全否定の原理と倫理」85年、全8）。政治へ超越しつつ、文学のうちに内在すること（内在に連関している超越）を志向していると考えられる。「コミュニケーションに対して、僕は徹底して反対の考え方をとるから、やはりポドーレッツ（アメリカの新保守主義の論客―引用者）とか、ソルジェニーツインのその面での仕事を非常に高くかっています。だけど、それはあくまで社会的考察乃至文学的省察としてであって、それじゃ徹底的にソ連や中国のような体制に対して闘いぬけというかというところじゃない。というのは、イデオロギーといえども人間の作ったものだし、やはり時間をかければ変わってくるはずだという考え方をするし、まして国という単位になって、アメリカ対ロシアという場合、徹底的に闘いぬげなんてことはいえない。……両者の極端な対立は少しずつ緩和していくより仕様がな。ねばり強く努力して機

の熟するのを待つという態度が必要だ」（『私のなかのアメリカ』84年、全5）。この発言にもみられるように、鮎川は政治状況をイデオロギーに囚われることなく冷静に柔軟にとらえていく。軍事についても、日本人の軍事アレルギー、核アレルギーを批判し、軍事力の存在する現実、平和のために軍事力が必要な現実へ超越していくことを主張している。以上のような文学から政治への関心の重点の移動のうちには、超越に連関している内在から内在に連関している超越への鮎川のありかたの移動をみることができる。

さらに生活における自由、個性、多様性の展開への鮎川の志向も内在に連関する超越としてとらえることができる。「ここで強いて私のユートピアを空想するとすれば、それは、すべてが善であるというような平面的なものではありえない。未来都市は、どうしたって物理的、心理的に立体交叉のうえに組立てられていなければならぬのである。人はそれぞれ考えも違えば趣味も違う。下町の陋屋が好きな者もあれば、山の手の邸宅が好きな者もある。また、ペントハウスのつべんに住むのも乙なものである。昼の生活の好きな者は昼、夜の生活が好きな者は夜と、要するに適当に移動性があるって、誰もが好きなように暮らせればいいのである。……人間の全可能性を吸収できる多次元的な空間としての都市。おお、偉大な都市よ」（『急いでいるのに邪魔つ気な群集め』69年、全5）。都市にお

ける自由な生活への志向の延長上に鮎川の遊びへの嗜好がある。鮎川は、遊んでいる人々の中にいることに違和感を感じず、「安んじて、それらの群集の一人であることができる」としている（『パチンコとゴルフ』74年、全7）。遊びも限定された範囲内における内在に連関している超越なのである。

次に、以上のような内在と超越との連関に依拠して、内在と超越との離反を批判する鮎川のありかたについてみてみよう。まず内在から離反している超越に対する批判をみてみよう。マスメディアによってからめとられた世界、ゲームとしてとらえなおされた世界、記号の集合としてとらえなおされた世界といった疑似現実、シミュレーション、シャドワイグジスタンスのうちに、積極的に、しかし受動的に適應するありかたを批判している。これらの世界は外部から与えられた世界であり、そのうちに内在することはなく、その世界へ受動的に超越するのである（『表現の根拠』84年、全5。「疑似現実の神話はがし」84年、全5）。芸術、学問等、様々な領域における専門化、「アートのためのアートにすぎない〈文体〉作り」（『文体的思考』78年、全拾）のうちに受動的超越を見出している。さらに文学者における、「存在の不安を解消するため」の「破壊的な情念や妄想」の拡大（『往復書簡による対論』86年、全7）、左翼における破壊行動、犯罪行為に対する内心の歓迎（『三浦和義』擁護論を一

蹴する」85年、全7）を、破壊への受動的超越としてとらえている。

次に超越から離反している内在に対する批判をみてみよう。現代において、日本において、文学者、知識人において、社会、他者に対する関心、行動意欲（超越）が衰弱し、内面に自閉している（内在）としている。「日本のジャーナリストには、責任をとりたくないという気持ちもあって、野党的立場に立ちたがるのではないか。かといって、社会党なら社会党支持を打ち出すということもしない。中立を装うことで、公正な印象を与えようとでも思っているらしい。だから、つねに自分にとって安全な言論しか展開できないのである」（『レッド・ネットワーク』の哲学』85年、全6）。このような自閉が可能になってきている背景として、個人を結合し、拘束する公的なもの（文化、制度、権威）が喪失されていることを指摘している（『私のなかのアメリカ』84年、全5）。男女の愛情、家族愛への内在によって外部の世界が見えなくなること（超越からの離反）を危険なこととして指摘している（『家族とは何か』75年、全8）。「アパシー」（超越から離反している内在）と「ファナティシズム」（内在から離反している超越）とを表裏一体としてとらえている（『抒情の可能性』69年、全2）。

（2）内在と超越との離反

超越から離反している内在と内在から離反している超越とから構

成されており、まず前者についてみてみよう。戦後第一期における内在に連関している超越を破壊し、風化にさらし続けてきた結果、超越から離反している内在に鮎川を含めた日本人が到達してきているとみることができる。「人間の内面性の世界」の保持が可能かという問に対し、鮎川は、「可能であるけれども、それは、ただ全体から切り離された個としてしか可能じゃないということじゃないかな。

その人の内面性の表現というものが、同時に、一つの時代とか一つの社会、あるいは共同体の運命といったものといやおうなくかわっていく、それ自体トータルなものの表現を含みうるものとして可能だというんじゃない、ただ、単独の個においては可能かもしれない」と答えている（「文学の戦後」79年、全8）。「時代」、「社会」、「共同体」への超越が破壊されてきているのである。詩「My United Red Army」（72年、全1）、詩「冬のファントム」（80年、全1）にはこのような破壊を通じた反世界への志向が提示され、詩「父」（79年、全1）の「測り知れない深さで／世界を映す鏡に／何も映っていないときには／わたくしの顔が映るのである／子のいない冷たい歓喜に／すこし歪んだわたくしの顔が。」には、世界へ超越することのない「わたくし」が提示されている。

「生きることに困難を覚えていた青年時代だったら／一瞬の激情で死に突入していたかもしれない／世をも人をも厭いつつ生きてい

て／死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた／ところが遅れてやってきた壮年時代に入ると／生きていくことがだんだん心地よくなってきて／死は単なる事実になり／生きることに怖れも困難も感じない髪の毛の薄い男になっていた」（詩「死について」76年、全1）。死への超越がなくなり、超越から離反して「生きること」のうちに内在しているのである。詩「消息」（76年、全1）、詩「私信」（76年、全1）においては、「神」、「神の代替物」、「自由」への超越が風化していく「とり返しのつかぬ時間」の経過が提示されている。「悲しい父性よ／おまえは誰にも似ていない／自分を思い出すのに／ずいぶん手間暇のかかる男になっている」（詩「Who I Am」77年、全1）においては、他者、社会、過去への超越からの離反が提示されている。

破壊、風化によって到達した、超越から離反している内在の窮極を提示しているのは詩「海の変化」（82年、全1）である。「もはや、わたくし」と特定する必要はない。わたくしには、わたくし以外の／どんな現象も起りようがなく、わたくしの影は、孤独とはいえなくなっているから、／……わたくし、とは誰だったのだろう？。この窮極において、「わたくし」が誰か他者に同一化しているということ（「誰だったのだろう？」。超越）はなくなり、「孤独」を意識することもなく、遂には「わたくし」ということ自体も失なわれる。

「巨大な生きものの胎内にのみこまれるように、／みるみる漆黒につつまれていく、」。この窮極は死であるが、同時に誕生以前への帰還（「胎内」）である。詩「帰心」（70年、全1）、詩「秋の祈り」（77年、全1）、詩「山を想う」（81年、全1）には静謐な自然への帰還（超越から離反している内在）が提示されている。

歴史に対する見方が若い時とは違ってきたとし、歴史をつくっていくのは人間の作為ではなく、自然であるとしている。政治も戦争も自然であるとしている（「対幻想」と「共同幻想」）75年、全8。「書く」ということ、『鮎川信夫著作集9』思潮社、一九七五年）。

戦争犯罪についても、個人の判断、行為としてなされたというよりは、「自然力」が働いているとし、個人の責任を追及することに消極的な姿勢を見せている（「生の体験」と詩の体験）、『鮎川信夫著作集9』。

次に、後者の内在から離反している超越についてみてみよう。「何かであること」によって、値段をつけられ、競売に付されるのが、世の中のしきたりである。とすれば、私は何者でもない、という胸奥からの叫びは、それこそ勝利の声であろう（「増田みず子『自由時間』」84年、全6）。世界の秩序、役割のうちに「何者か」として配置されること（内在）を拒絶すること（内在からの離反）を志向しているのである。「鮎川が深夜のレストランで物思いにふける時の一引用者）主要テーマはいつもきままっている——『おれは自分の

人生の大部分を、なにかしたくないことのために奪い取られているのではないか？」 満足のいく解答など、けっして浮かんではしないテーマである（「一人のオフィス」66年、全5）。無自覚のうちに、世間から強いられている「なにかしたくないこと」をしているのではないかという警戒が強いのである。内在に対する警戒、内在から離反しようとする志向が強いのである。

鮎川はごく一部の人にしか知られないしかたで結婚していたが、子どもはつくらず、夫人との関係も独立した個人としての関係であり、家族をもっているという意識はなかったと考えられる。意識的に家族をつくるまいとする志向が強く（「精神の確立と戦争」75年、全8）、さらに、「誰とでもぼくは個人的に親しくなるのはいやです」とも言っている（「崩壊の検証」82年、全8）。「他人の生活とか運命に対して、しよせん人は傍観者であるほかはない」とも言っている（「ある邂逅」69年、全7）。家族、親密な関係のうちに内在することを拒否しているのである。「どこまでも 迷って迷って／家のない場所へ行ってみたい／どこへも帰りたくない／憧れにも恐怖にも 母にも恋人にも／暮れのこる灰色の道が／夕焼空にふと途切れている」（「路上のたましい」68年、全1）のうちにも、肉親、恋人との関係への内在から離反しようとする志向をみることができる。

「戦争があっても、革命があっても、そんなこととは大して関係

なく、普通人の生き方はこういうものだとでもいつているように、M（中学時代の親友で、三十年ぶりに鮎川を訪ねてきた一引用者）は自己の生活のありのままを語ってくれた。飛躍もなければ面白くない平凡な話の連続であったが、そこには批判の余地のない生活の実質があった。批判の余地がないと私が感じたのは、彼が選択の余地のないぎりぎりのことしか語らなかつたからであろう。それは、あえて言えば、彼の言葉の貧しさのためであつたかもしれない。多弁な文学者のように彼が自己の生き方を合理化し粉飾し誇張して語れば、（語るような人間になつていれどということだが）私は彼の話にいくらでも批判の契機を見出したにちがいない。都会育ちにしては朴訥な彼の話に耳を傾けながら、私は『Mを真人間にしたのは言葉の貧しさだ』という思いを禁じえなかつた」（『ある邂逅』69年、全7）。言葉が表現しようとするものうちへの内在を拒否しようとする志向がある。

このような内在からの離反志向に対し、この世界のうちに内在することが不可能になつてきているという世界についてのみかたが照応している。「マスコミでもジャーナリズムでも、とくに文化人なんてのは、話し合いの精神みたいなことばかりいつているでしょう。じつにあれは滑稽なことだと思ふ。たとえば戦前だつてヒットラーと話し合うなんてできない相談だつた。誰にとつても不可能だつた

わけです。話し合えると思つた連中はみんな失敗したし、かえつて事態をわるくした。そういう場合にとる態度はひとつしかない。『俱に天を戴かず』という態度しかない。そういう態度で示すよりほかにどうしようもないことが、実際にはたくさんあると思う。どうしても話がわからない、いうことは聞いてもらえないとかがあたり前なんで、そういうことを前提にしないと、論文などおもしろくないですね。どこからみても非の打ちどころがない、誰でもが承服しなければならぬんだといつたかたちで説得にかかる。これはよけいなおせっかいです」（『現状況における知性の役割』、『鮎川信夫著作集9』）。他者と共有している秩序はなく、「話し合い」、「承服」、「説得」が不可能である世界のうちに内在することはできないのである。

戦争はナシヨナリズムの衝突であるとし、ナシヨナリズムは、個人のエゴイズムが国家レベルにまで拡大されたものであるとし、個人のエゴイズムが不可避の本能であるように、戦争も不可避であるとしている（『戦争について』75年、全8。「体験・思想・ナシヨナリズム」76年、全8）。戦争の世界に内在することはできないのである。

この内在することができない世界における行為は内在から離反している超越である。鮎川は、法則によって支配されている人生の局面と、個人の意志によって行為している人生の局面とを対置し、前

者が大部分であるとしながらも、後者の意義を強調し、両者が「いつも悲劇的に矛盾」しているとしている（『歎異抄』の現在性」79年、全8）。前者は内在であり、後者は超越であり、両者が矛盾しているということは両者が離反していることであり、後者は内在から離反している超越となる（前者は超越から離反している内在となる）。

後者のうちに、その行為が絶対的なものであり、固有なものであり、一回しかなされないということ、及びその自覚を見出している。

「人間は、死によつてのみ、人間でありうる。『不死である』というのは無意味なことだ。人間を除けば、すべての生物は不死である。なぜなら、彼らは死というものを知らないから」とボルヘスは、この物語（ボルヘスの小説、「不死の人」―引用者）の主人公に語らせている。始めも終りもない輪廻の世界に住む不死の人びとの共和国では、『無窮の時がたつうちにはあらゆる人間にあらゆることが起る』から、生の全体を決定する原理は何もなく、『完璧な寛容さと、完璧に近い冷淡さに到達』している。あらゆる行為は正しく、同時にどうでもいいことになっている。一人の不死の人がすべての人だとすれば、すべての人であることは、『私』が存在しないのと同じである。不死の人にはどんな個性も存在しようがないのである。人間は死すべき存在である。そして、いつ死ぬかもわからないとすれば、

『人間がなしとげるすべての行為は最後の行為であるかもしれない』のである。だからこそ、生涯に一度しか起らないようなことも起るし貴重な偶然に際会することもありうるのである。勇気をもつことも幸福になることも可能になるのである」（『ボルヘスの『不死の人』85年、全6）。人間の行為における絶対性、固有性、一回性、及びその自覚は自己の死の自覚、時間意識において構成されており、さらにこれらの自覚、時間意識の基盤の上に自由の意識、自由な決断としての勇気が発生してくるのである。

行為の集積としての歴史過程についても、「善悪という判断はほとんど無意味であり、そういう形で展開する論は不毛でしかない」とし、「こうすればよかった、ああすればよかったという問題にはならないし、……こうでしかありえなかったということしかいえないのではなからうか」としている（『疑似現実の神話はがし』84年、全5）。「善悪という判断」、仮定としての歴史の想定という内在は歴史において不可能なのである。

「最近一つだけ自分で変わったなと思うことに、間違いつてものをやりたくなつたことはありますね。おかしい言い方だけど、とにかくよく、間違いつてことはやってないんですよ。戦争中からずっと続いて一べんもやったことがない。もし間違いがあつたらどつからでもかかつてこいと言えるくらいやってないわけ。だけどそ

れには一つの秘密があつて、ぼく自身が一種の受動態なんですよ。だから間違ふかもしれないところには足を出さない。けどそんなのちつとも感心したことじゃないということに近頃気が付いたんだよ」（『全否定の原理と倫理』85年、全8）。自分が正しいと思うことに「受動的」、防衛的に内在することから離反し、「間違い」へと超越しようとするのである。さらにいえば、正しい、「間違い」に固執すること自体が内在なのであり、いかなる行為、ありかたも可能であり、人間はその個性への内在から脱却して、あらゆるありかたに超越していくことが可能であるとしている（「戦争について」75年、全8。「精神の確立と戦争」75年、全8。「〈対幻想〉と〈共同幻想〉」75年、全8）。

註

- (1) 吉本隆明「鮎川詩の問題」（同『鮎川信夫論』思潮社、一九八二年）六一〜六四頁。
- (2) 牟礼慶子『鮎川信夫―路上のたましい』思潮社、一九九二年、一〇三〜一〇四頁。
- (3) 瀬尾育生『鮎川信夫論』思潮社、一九八一年、七八〜八五頁。
- (4) 瀬尾育生『鮎川信夫論』一三九〜一四一頁。

A Study of Nobuo Ayukawa's Thought

Tetsuo ITAGAKI

鮎川信夫の思想
——
板垣

In this paper, I attempt to throw light upon thought and idea of the poet, Nobuo Ayukawa (1920-1986) in terms mainly of the intimate relationship and/or the separation between “immanence” and “transcendence.”